

発心 決心 継続心

(平成27年度 進路資料「軌跡」巻頭言より)

当時、現代国語と呼ばれた授業が好きだった。特に、詩歌のときは、期待して授業に臨んだものだ。詩歌は作者の想像力の産物であり、読者の想像力を発動させるものである。従って、読者は自由に連想し、そして感動すればよい、そのようなことをいわれて勝手気儘に感動しては、これはいいなと思ったものだ。作者の詩情や思考はもしかしたら少しもつかんではいなかったのかもしれないが、それでいいと思った。授業は楽しかったし、感動もしたから。

算術の少年しのび泣けり夏 (西東三鬼)

高校1年の時、家を新築した。新しい家ができるまで、窓が一つしかない薄暗い蔵の中で一人で勉強した。数学が好きで一生懸命勉強したが、テストはさんざんであった。あいつは解けるのに何で俺は解けないんだろう。悔しくて悔しくて思わず泣いてしまった。このことは恥ずかしいので誰にもいわないでいたが、この句に触れて高校時代の自分を懐かしく思い出した。

同じような人がいるんだな、やっぱりあれでよかったんだ。本格的に数学を意識して勉強しようと思ったのは、あの蔵の中だったんだと思う。同時に、数学に限らず、今もそんな人がいっぱいいるのだから、そういう人たちを応援したいと心から思う。

春風や闘志いだきて丘にたつ (高浜虚子)

春は決意の時であり、再生の時である。誰にだって今度こそリベンジ、今年度は絶対にやってやる、生まれ変わったつもりで頑張るぞ、そうした思いの一つや二つはあるだろう。思いは必ず実現するという強い信念と、どうしてもこうありたいという願望が実現するための必須条件である。決意を持った後はそれに向かって努力するのみです。決意があなたの心からのものであれば大丈夫。不断の努力はこうした決意によってのみ保証されます。

「努力して努力して、こんなにやった。これ以上努力できない。もう、少しもがんばれない。やり切った。」これでは不十分、まだまだです。真の努力というものはその先にある。限界を超えたところに夢の実現がある。そしてこの夢の実現は、真の決意から始まるのです。

かたつむりそろそろ登れ富士の山 (小林一茶)

歩みがどんなに遅くとも毎日登ってさえいればいつかは頂上に着く。不断の努力はどんなことも成し遂げる、ということなのだろう。読んでほのぼのとした感じがして、そして後でじんわりがんばってみようかなという気になる不思議な句です。

学生時代、一冊の本を読もうと決心した。1日に1ページいやその半分でも数行でもよいから絶対昨日よりは進むぞと決意しての挑戦だった。最初は難解で遅々として進まなかった。でも、ある日から徐々にペースも上がり、どうにか読み切った。あの時、何かが変わった気がする。数学力だったのか、人間力だったのか。学問は一人でするもの、と言っていた先生の言葉がすごくよく理解できた。ゆっくり、だけど着実に。微量だけど確かな進歩。あの時から、私のモットーになっている。

自分の生き方・ありようを常に自問しながら、決意したことに向かって毎日小さな一歩を踏み出していく。真摯な努力を積み上げていく。物事を成し遂げるにはそれ以外に手はなく、そしてそれこそが王道であるとおつくづく思う。この冊子の中から先輩たちのそうした姿の一端を読み取り、もう一度自身の決意や思いを新たにしたいと願う。

(完)